

「20世紀日本における知識人と教養

―丸山眞男文庫デジタルアーカイブの構築と活用―」プロジェクトについて

安藤 信廣

【プロジェクト開始の経緯】

文部科学省は二〇一一年（平成二三年）十二月、「平成二四年度 私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」の公募を行った。私立大学の研究活動を強化するために、重要な研究施設や研究課題に対して基盤形成の支援を行う事業である。

東京女子大学はこの公募に対し、大学の貴重な財産である丸山眞男文庫の資料にもとづく事業によって応募することを決め、丸山眞男記念比較思想研究センターを中心に、関連部所、丸山文庫協力の会と検討を進めた。その結果、「二〇世紀日本における知識人と教養——丸山眞男文庫デジタルアーカイブの構築と活用——」プロジェクトを立ち上げ、このプロジェクトによって文科省の公募に応募することとした。

二〇一二年（平成二四年）一月から具体的な準備を進め、プロジェクトの内容の確定、プロジェクトに参加する本学教員・学外研究者の依頼等を行った。また学内の関連部所、ことに教育研究支援部・課、及び図書館課の協力を得て提出書類を作成し、大学評議会、理事会の

承認を得て、二月二日、文科省に提出した。

文科省による審査の結果、四月六日、本プロジェクトは「平成二四年度 私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」に採択された。研究部門で五年間（二〇一二年度～二〇一七年度）にわたる文科省の支援事業に採択されるというのは、本学として初めてのことである。

【プロジェクトの二つの課題】

本プロジェクトは、丸山文庫収蔵資料を活用した研究活動の展開と、収蔵資料のデジタル・アーカイブ化を進めることを目的としている。文科省に提出した申請書「平成二四年度 私立大学戦略的研究基盤形成支援事業 構想調書」（以下「調書」と称する）の「研究目的・意義」欄には次のように述べられている。

新しい世界認識を開く基礎となる教養の重要性が注目されている今日、二〇世紀において様々な知的分野で巨大な足跡を残し、教養についても独自の認識を展開した丸山眞男の業績の再評価が強く求められている。東京女子大学丸山眞男文庫は、丸山の蔵書

とノート・草稿類のほぼ全てを一括して所蔵しており、(中略)丸山の業績の再評価を行ってきた。丸山眞男記念比較思想研究センターは、丸山文庫を運営してきた実績をふまえ、本研究において丸山をはじめとする二〇世紀の知識人たちの教養形成過程及び教養観を解明する。また新渡戸稲造・南原繁・丸山らが知識人の国際的コミュニケーション形成に果たした役割を明らかにし、二一世紀における新たな知的コミュニケーション形成の方向性を探求する。同時に丸山文庫所蔵資料をデジタル・アーカイブ化し、広く日本及び世界に向かって公開する。以上の研究によって、二一世紀の教養と知のあり方を究明する上で重要な貢献をすることができると考える。

ここに述べられている通り、本プロジェクトは、まず第一に、丸山文庫の資料を活用して二〇世紀日本における教養についての認識、その形成過程、知識人のコミュニケーションの特徴等を明らかにすることを課題としている。第二に、その基礎となる丸山文庫収蔵資料のデジタルアーカイブ化を進めて広く社会的利用に供し、これまで未解明だった丸山の思想の形成過程に光をあてることを課題としている。

【第一の課題——二〇世紀の知識人と教養の究明】

プロジェクトは、二つの課題に即して、進められる。第一の課題(テーマ番号1)は、二〇世紀における教養の特質や形成過程と、それを支えた知識人のコミュニケーションについての研究である。

現代社会のかかえる複雑な問題の解決に向けて、新しい世界認識が求められている。しかしそれは一朝一夕に生み出せるものではない。学術の様々な分野を総合した教養無しには、現代の複雑で巨大な問題群を解決する新しい世界認識を生み出すことはできない。

そうした視点に立つとき、二〇世紀日本において知の様々な分野で活躍し、教養について豊かな認識を展開した丸山眞男の業績が、きわめて重要な意義を持つものとして浮かび上がってくる。丸山眞男は日本政治思想史を研究の中心としながら、その範囲を超えて多彩な思考をくりひろげてきた。丸山は二〇世紀において最も広い教養を持つ思想家の一人だったばかりでなく、みずからの思索や学問において、教養の意義を重視する姿勢を貫いた思想家だったといえる。二〇世紀における知識人と教養との関わりを究明するためにも、丸山自身の教養についての認識を知るためにも、丸山文庫収蔵資料は大きな役割を果たすことができるだろう。そのような見通しのもとに、前記調書「研究内容」では次のように述べている。

丸山眞男記念比較思想研究センターでは、これまで丸山文庫収蔵資料を利用しつつ、丸山研究・日本思想史研究等を進めてきた。その蓄積をふまえ、(中略)二〇世紀の知識人の教養形成過程・教養観・学問観等について多角的な研究を行う。

現在、人文・社会科学の様々な領域を超えた交流と融合が課題となっている。それはとりもなおさず、科学の諸領域を総合し且つ新しい認識を開く教養の重要性が再発見されているということ

でもある。二〇世紀において日本の知識人は、教養について多彩な思考を構築してきた。(中略)日本人にとって、教養・学問についての認識は、それ自体が深刻な課題だったといえる。本研究においては、この分野でも創造的な思索を重ねた丸山の業績を再検討しつつ、教養と学問のあり方について多角的な検討を行う。(中略)具体的には次のような内容の研究を展開する。

第一に、丸山眞男をはじめとする二〇世紀の知識人たちがどのように人文・社会科学の様々な領域を総合して教養を形成したか、またどのような教養観・学問観を構築したかを解明する。

第二に、新渡戸稲造・南原繁・丸山の知的系譜を検討し、ことに彼らが知識人の国際的コミュニティ形成に果たした役割、国際的コミュニティから得たものを明らかにする。

第三に、丸山の政治論・思想史論・文化論をはじめとする膨大な業績を再検討し、新渡戸らの業績をも検証し、二一世紀における教養のあり方と知的コミュニティ形成の方向性を探求する。

以上のような内容を持つ本研究は、現在日本と世界にとって重大な課題となっている教養・学問のあり方の問い直しにおいて、重要な貢献となると考えられる。同時に創立以来リベラル・アーツを教育理念としてきた東京女子大学の研究・教育基盤形成、特に社会科学分野の基盤を強化する上に大きな力となる。

このように、丸山自身の教養観、その形成過程、二〇世紀知識人の国際的コミュニティの形成とその中で丸山らの果たした役割等を多

角的に探究することが、本プロジェクトの第一の課題である。対象とする時代は二〇世紀を中心とするが、その前史としての一九世紀についても検討し、二一世紀の現代にも議論が及ぶと考えられる。

【第二の課題——デジタルアーカイブの構築】

第二の課題(テーマ番号2)は、「丸山眞男文庫所蔵資料の調査研究とデジタルアーカイブ構築」である。

丸山文庫所蔵の資料については、丸山眞男記念比較思想研究センターが学内外の協力を得て調査、整理・公開を行ってきた。これまでにその大部分を公開するに至っているが、その保存を確実にするため、また利用をさらに容易にするために、文庫所蔵資料をデジタル化してデジタルアーカイブを構築すること、これが本プロジェクトの第二の課題である。前記調書の「研究内容」には、次のように述べられている。

丸山文庫には、一二二〇〇冊の開架図書以外に、六〇〇〇冊以上の書き入れや折りこみのある図書・雑誌、約六〇〇〇点の楽譜類、数千点以上の草稿ノート類、さらに内外知友からの多数の書簡(段ボール二五箱程度、他に丸山自身の書簡のコピーや控え)などが所蔵されている。過去一三年間の調査によってその全体像はかなり明らかにされ、また幾つかの未公刊草稿資料類は『丸山眞男記念比較思想研究センター報告』誌上で公刊されてきた。しかし多くの資料に関する研究や、内外学界への紹介は、今後の課題とし

て残されている。研究テーマ2では、これらの一次資料類の調査や研究、重要なものの翻刻や出版、デジタルアーカイブとしての構築を行うことで、国内外研究者による資料への接近を容易にし、丸山の思想と学問に対する一層深い理解に資することを旨とする。主な研究としては、①未刊に終わった「正統と異端」関係の資料を調査し、長期に亘った同研究会の全体像を時系列を追って明らかにする。また「正統と異端」という課題設定に込めた丸山のモチーフを時代状況と関係させて解明する。②一九五〇年代後半に丸山が東大法学部で行った日本政治思想史講義を復元し、内容を検討する。当時丸山の日本史像は、縦の発展段階論的な見方から、文化接触という横からの契機による変動を重視する見方へと変わっていくあり、六〇年代の「古層」論への過渡期にある。同時期の「日本の思想」「開国」等の重要論文と深い関係があり、これらの全体の関連の分析を目指す。③文庫に所蔵されている南原繁著書への丸山の書き込みや本学の新渡戸稲造文庫所蔵の資料なども参考にしつつ、新渡戸・南原・丸山の三者の思想的関連を分析する。④丸山への来簡類を整理・調査して、二〇世紀の日本を舞台とした内外知識人の学問的な交流過程を明らかにする。⑤丸山の書き込みのある楽譜類を調査することで、丸山と音楽との関わりを分析し、丸山の人間性の一層深い理解に資する。以上いずれも、研究テーマ1の「二〇世紀日本における知識人と教養」という主題と重要な関連をもっている。

このように、第二の課題は、デジタルアーカイブ構築のための具体的な調査と整理を中心とする。しかしそれにとどまらず、その作業を通じて丸山の知的遺産の全体像に迫ろうとするものである。特に、未公開資料を再調査することによって、これまで解明されていない丸山の知的営為の重要な部分を究明できると考えられる。また、来簡や書き込みのある楽譜類の調査によって、丸山の多面性や、丸山を軸とした学問的交流の広がり等、従来為しとげられなかった広く深い研究が可能となる。

第二の課題は、第一の課題の基盤となることが明らかである。しかしそれだけでなく、第一の課題と密接に関連し、一部重なりつつ、相互に補い合って展開することになるだろう。

【プロジェクトの年次計画】

以上の課題を達成するために、次のような年次計画が立てられている。

《平成二四年度》丸山眞男の既刊著書・論文等を網羅的に調査する。未公開草稿資料類の全面的調査と翻刻を開始する。

《平成二五年度》丸山が研究した主題に沿って、丸山以後の諸研究を探索する。丸山に関連する欧米の文献を調査する。未公開草稿資料類の調査をもとにデジタル化を開始する。

《平成二六年度》未公開草稿資料類の調査をもとに翻刻を進め、デジタルアーカイブ・システムの構築に向けた準備を開始する。

初年度以来の業績をふまえ、中間シンポジウムを開き、成果をまとめるとともに、自己点検・評価を行う。

〔平成二七年度〕丸山を中心とする近代日本の教養の思想的系譜に関する研究を進める。未公刊草稿資料類のデジタル化を進め、デジタルアーカイブ・システムを構築し、部分公開を開始する。

〔平成二八年度〕二〇世紀日本における教養についての国際シンポジウムを開催し、五年間の成果をまとめる。未公刊草稿資料類のデジタルアーカイブを完成させ、資料を公開し、研究成果を刊行する。プロジェクト全体についての自己点検・評価及び外部評価を実施する。

以上のような計画のもとに、五年間のプロジェクトが発足している。このプロジェクト期間中に、研究員全体で「研究会」（隔月開催）を行うこととなっており、既に二回の研究会が開かれた。また、多くの研究員・スタッフの力により、丸山文庫所蔵資料の調査・整理が進められ、デジタルアーカイブ構築に向けて具体的に準備が進められている。今後は、さらに多様で活発な研究活動が展開される予定である。

このプロジェクトを成功させるために、責任者として、全てのプロジェクト参加研究者・スタッフとともに新たな決意で研究に臨みたい。

《プロジェクト参加研究者》

テーマ1

安藤 信廣（東京女子大学現代教養学部学部長・研究代表者）

雨田 英一（東京女子大学現代教養学部教授）

小檜山 ルイ（東京女子大学現代教養学部教授）

茂木 敏夫（東京女子大学現代教養学部教授）

湯浅 成大（東京女子大学現代教養学部教授）

油井 大三郎（東京女子大学現代教養学部教授）

區 建英（新潟国際情報大学教授）

荻部 直（東京大学大学院法学政治学研究科教授）

孫 歌（中国社会科学院文学研究所教授）

アンドリュース・バーシェイ（カリフォルニア大学バークレイ校教授）

渡辺 浩（法政大学法学部教授）

眞壁 仁（北海道大学大学院公共政策学連携研究部准教授）

テーマ2

黒沢 文貴（東京女子大学現代教養学部教授・研究代表者）

土合 文夫（東京女子大学現代教養学部教授）

松沢 弘陽（北海道大学名誉教授）

中田 喜万（学習院大学法学部教授）

平石 直昭（帝京大学文学部教授）

宮村 治雄（成蹊大学法学部教授）

河野 有理（首都大学東京都市教養学部准教授）

《プロジェクト研究スタッフ》(二〇一二年度)

金子 元

川口 雄一

佐藤 美奈子

堀内 健司

山辺 春彦